



2021

国語

注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は ㊦ から ㊧ まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学六年生のはるかには、一歳年下のうみかという妹がいる。うみかは『科学』という雑誌を愛読するなど少し変わっており、クラスでも孤立しがちであった。はるかはそのようなうみかを疎ましく思う一方で、心配してもいた。ある時、うみかが逆上がりができないために居残りさせられたことを悔しく思っていることをはるかは知り、練習につきあうことにした。しかし、二回目の練習の時に友達から遊びに誘われたはるかは、うみかとの約束をすっぽかしてしまい、一人で練習していたうみかは鉄棒から落ちて骨折してしまつた。はるかがお見舞いに行った時に、うみかは「宇宙飛行士」になる夢を姉にだけ打ち明けた。

「手術、するんだ？」

「うん。たぶん」

うみかが、クラスメートからもらった色紙のメッセージを目で読んでいる。一度ずつ読んだら、それでおしまいとばかりに、X になってしまう。蛍光ペンを駆使して、かわいい絵を入れてうみかにメッセージを綴つてる子たちとうみかが本当はそんなに仲良くないことを、私も知っていた。

「あのね、お姉ちゃん」

「うん」

①「もし、骨折で、手術して、腕にボルトを入れたりすると、それがたとえ一個でも、もうそれだけで宇宙飛行士にはなれないんだって」

二度目の「え」は、大きな声になった。うみかが目を伏せ、何でもないふう窓の外を見る。だけど、私にはわかる。わざとだ。無理やり平気そうにしている。うみかはいつも、しっかり私の目を見て話す。

「痛いのも、逃げA がないんだよね」

②言葉がかげられない私の前で、うみかが小さくため息をついた。

「何をすればB が紛れるっていうのがないから、宇宙に行ってるしかない」

「宇宙？」

「想像するの。自分が宇宙にいるとこ」

うみかはそう言っつて、ちよつとだけ笑つた。海に穏やかな波が寄せてすぐになくなる時みたいなの、静かな笑顔だった。

夏休みになつて少しして、うみかは長かった髪を病院でばっさり、お母さんに切られてしまった。怪我のせいで思うようにお風呂に入つたり、髪を洗えなくなつて、長い髪をきれいなままにしておくのが難しくなつたのだ。ボサボサになつちやうし、ちよつど暑い季節だし、いいじゃない、とお母さんは簡単なことのように言つたけど、お見舞いに行つた病室で、髪を短くされたうみかを見た時は、衝撃だった。

「スースーする。変な感じ」

うみかは何でもないことのように言つてみせたけど、^③この時も私の目を見ようとしなかつた。

私の小六の夏休みは、ほぼ、うみかの怪我の思い出で埋まつた。うみか自身が感じてるように、あの子の怪我は私が思つていたよりずつと重傷だった。両親が私が寝た後で、いつまでもリビングで話してる声が聞こえて、私は Y 布団を出て、ドアに耳をくつつけて、声の内容を聞いていた。

——肘のところから切つて、神経を一つ一つくつつけ直す——という声を聞いた日、私は全身の血が一度に下がつていくのをはつきり感じた。

^④聞いてしまったことを後悔しながら布団に入ると、背筋が熱を出した時のようにぞくぞくした。

うみかが、手術する。

繋がつている自分の腕の付け根を見ながら、皮膚にメスが入ることを想像して、嫌だ、と叫びそうになつた。ダメだ、ダメだ、ダメだ、うみかの腕を切るなんてダメだ。

宇宙飛行士が目指せなくなるなんて、ダメだ！

眠れずにまた布団を出ると、二段ベッドの上から、うみかの机が見えた。並んだ『科学』のふろくたち。中に、ドーム型プラネタリウムの丸い頭が見えたら、気持ちちが抑えられなくなつた。

南向きのカーテンの向こうから、月と星の明かりが差し込んで、部屋の中は窓辺だけが明るかつた。ベッドを降りて窓を開くと、夜の蟬が鳴いていた。晴れた空に浮かぶ星の名前。学校で習つたけど、私は北極星と、北斗七星くらいしかわからない。

宇宙飛行士になるには、勉強ができることはもちろん、身体が丈夫なことだつて必要だろう。どうしよう。あの子は本気だ。あんなふう

に恥ずかしそうに夢を打ち明けるくらい、大事に思ってる。エンデバーの打ち上げを、楽しみにしてる。

私は、あの子のために何ができるだろう。

うみかに話を聞いてから、^⑤図書館で片っ端から宇宙飛行士に関する本を探して読んだ。手術したらダメなのか、目指すにはどんなことが必要なのか——、字がずらつと並んだ大人向けの分厚い本も開いてみた。

怪我は私のせいだ。どうしよう、どうしよう、と一生懸命内容を読んだけど、私にちゃんとした答えをくれる本は一冊もなかった。両親や先生に聞くことも考えたけど、宇宙飛行士の夢のことはナイショにするって、うみかと約束していた。

闇が、この時も少しも怖くなかった。去年の夏、うみかと歩いた浜辺の空も、こんなふうにあかい光に満ちていた。思い出したら胸が詰まって、あの時、ケンカしたことすら縋りつきたいほど懐かしかった。

海岸で、貝殻の音のことで私はうみかに怒ってた。あの子が「その音は——」と続けようとしたのを遮って、勝手に歩き出した。

だけど、あの時、あの子はなんて言いたかったんだろう。私が何で怒ってるのかもわからないあの子に、私は一度だって怒ってる理由を自分から説明したことがない。^C 答えるうみかに、私はいつだってそこで話すのをやめた。あの子が話すことはどうせ生意気で

かわいくないって決めつけて、まともに聞かなかった。

病院で聞いたうみかの言葉を思い出す。

——宇宙に行ってるしかない。

痛みには逃げ ^A がない、と話していた。何をしても、 ^B が紛れないって。

——想像するの。自分が宇宙にいると。

そう笑ってた。

ああ。

わかったよ、うみか、と心の中で呼びかける。

^⑥ 月がとても近い。私が見てるこの空の向こうにあるものを、うみかだったらもっとたくさん想像できるんだろう。あの子になら、見えるのだろう。

うみかはたぶん、宇宙にいるのだ。

嫌なことがあった時、いつも大好きな宇宙のことを思い出して、きつと耐えている。だから平気なんだ。クラスでひとりぼっちの時も、

ピアノが一人だけない時も、逆上がりで残された時も、お気に入りだった長い髪を切られた時も。つらくなかったわけがない。だからきつと、自分の居場所を別に作った。狭い教室や目に見える場所だけをすべてにしなかった。だから、あんなに強いのだ。

彼方かなたにある星々の明かりを見上げながら、私は自分に何ができるかを、必死に必死に、考え続けた。

(辻村深月『家族シアター』所収「1992年の秋空」による)

(注1) エンデバー：アメリカのスペースシャトル。一九九二年九月に日本人初の宇宙飛行士である毛利衛氏が搭乗した。

(注2) 私はうみかに怒ってた。：去年、砂浜で拾った巻き貝に耳を当て、はるかが「海の音がする」と言った時に、うみかが「貝の中から聞こえる音は、海の音ではなく自分の耳の音だ」と言い、耳の器官の話をし始めた。はるかはそのようなうみかを生意気だと感じ、腹を立てたことがあった。

問一 空欄X・Yに入る言葉を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

ア そつと イ さつさと ウ はつきりと エ もつと オ のんびりと

問二 空欄A～Cに入る漢字一字を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。(同じ記号には同じ語が入ります。)

ア 腰 イ 歯 ウ 場 エ 口 オ 間 カ 気

問三 傍線部①「もし、骨折で、手術して、腕にボルトを入れたりすると、それがたとえ一個でも、もうそれだけで宇宙飛行士にはなれないんだって」という話し方から読み取れることとして、もっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 「もし」という仮定を用いた話し方から、うみかが将来のことを常に考えているしつかり者であることが読み取れる。

イ 「宇宙飛行士になれない」という事実を淡々と語る話し方から、うみかが常に冷静な人間であることが読み取れる。

ウ 分かりやすくていねいな話し方から、妹であるうみかがはるかよりも賢く大人びていることが読み取れる。

エ 姉に対しても客観的な話し方をしているところから、うみかがはるかを無意識に遠ざけていることが読み取れる。

オ 一言一言切切るような話し方をしているところから、うみかが自分の怪我に対してショックを受けていることが読み取れる。

問四 傍線部②「言葉がかけられない私」とありますが、言葉がかけられなかった理由を七十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部③「この時も私の目を見ようとしなかった」とありますが、これはうみかのどのような態度だとはるかには理解していますか。本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問六 傍線部④「聞いてしまったことを後悔しながら」とありますが、なぜ「後悔」したのですか。その理由としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 両親がうみかの手術のことばかり話しているので、自分だけがのけ者にされてしまったような寂しさを感じたから。

イ 両親の話でうみかが重傷だと知り、怪我の責任が自分にあることの後ろめたさを改めて感じたから。

ウ 両親の話すうみかの手術内容から、手術の様子やうみかの将来の夢が閉ざされることを想像して怖くなったから。

エ 両親があまりにも具体的に手術について話していたので、聞いているだけで気持ち悪くなってしまったから。

オ 両親が自分には聞かせまいとして寝た後に話していたのに、それを盗み聞きしたことに罪悪感を覚えたから。

問七 傍線部⑤「図書館で片っ端から宇宙飛行士に関する本を探して読んだ」とありますが、何のためにこのようなことをしたのですか。

その目的として、不適当なものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア うみかに対して自分ができることを探すため。

イ うみかになりたい宇宙飛行士のことを理解するため。

ウ 宇宙飛行士になるための条件を知るため。

エ うみかが抱いた夢を秘密にするため。

オ 手術をしても宇宙飛行士になれる方法を探すため。

問八 傍線部⑥「月がとても近い」とありますが、はるかがこのように感じたのはなぜですか。はるかの変化をふまえて七十字以内で説明しなさい。

問九 本文の説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 宇宙という広大な世界を持ち出すことで、その中に生きる人間の小ささやはかなさを鮮明に伝えている。
- イ 会話以外の文章でも話し言葉を使用し、小学生の視点から見た出来事をうまく表現している。
- ウ はるかだけでなくうみかの視点も交えることで、姉妹特有の複雑な心情をわかりやすく伝えていく。
- エ 「ぞくぞくした」などの擬態語を多く用いることで、冷静に対応しようとするはるかのかの姿を表現している。
- オ 姉妹のやりとりのなかに親が娘のために真剣に話す様子を挿入することで、現実の厳しさや大切さを伝えている。

二

本文の筆者は、本文以前の部分で初期型のお掃除ロボットについて、雑な掃除しかできない様子を「気まま」で「あっけらかん」とした姿に見えると述べています。そのことをふまえた上で、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ここしばらくの「利便性を追求する」というモノ作りの流れは、^①個々の〈弱さ〉を克服することに向けられてきたようだ。いわゆる「ひとりでできるもん！」をめざそうというのである。そこで一面的な利便性は高まるように思うけれど、一方では〈持ちつ持たれつ〉の関係から遠ざかってもいるようだ。

例のお掃除ロボットがもっと完璧にお掃除するものであったらどうだろう。もうコードに巻きついてギブアップすることもなければ、ちよつとした段差であれば大丈夫！ 誰の助けも借りることなく、きっちり仕事をこなしてくれる。そのことでわたしたちの手間もだいぶ省けることだろう。ただどうだろう、^②それでおしまいということにはならないようなのだ。

すかさず「もっと静かにできないの？」「もっと早く終わらないのかなあ」「この取りこぼしはどうなの？」と、その働きに対する要求をエスカレートさせてしまう。そうした要求に応えるべく、技術者も新たな機能の開発に勤しむことに。ロボットの高性能さは、わたしたちの優しさや工夫を引きだすのではなく、むしろ傲慢さのようなものを引きだしてしまうようなのだ。

これはお掃除ロボットに限らず、他の家電製品などにも当てはまるものだろう。量販店に並ぶ商品には、「新機能」と称して、毎年のように新たな工夫が加えられる。「今年の電子レンジは、サククリ解凍機能がついてるんです！」との店員のアピールに、「えっ、そのサククリ解凍って、なに？」と思いつつも、なにげなく選んでしまう。同じ価格であれば、その新たな機能がついているというだけで、ちよつと得した気分になるからだろう。そうしたこともあってか、作り手としても手を緩めるわけにいかない。これは、いわゆる〈足し算のデザイン〉の姿であり、認知工学者のドナルド・ノーマンの指摘した「なし崩しの機能追加主義」そのものだろう。「もっと、もっと」という要求のなかで、いつの間にか^③消耗戦を強いられてしまうことだろう。

〈お掃除してくれるロボット〉と〈それを使う人〉、その役割のあいだに線を引いた途端に、相手に対する要求水準を上げてしまう。こうした図式は、モノとの関わりに限らず、いま^④至るところに生じているようなのだ。

おばあちゃんの世話をするというなげない関わりが職業となった途端に、「もっと、もっと」と、相手に対する要求を高めてしまう。その結果、〈介護する人〉と〈介護される人〉とのあいだに垣根が生まれてしまう。あるいは、^b至れり尽くせりの講義を準備すればするほど、〈教師〉に対して「もっと大きな声で、もっと手際よく」と〈学生たち〉からの要求がエスカレートしてしまうこともある。

⑤ こうした場面に遭遇するたびに、お掃除ロボットの気ままさやあつげらんとした姿もいいなあと思う。老練な教師ならば⑥ すでに心得ているように、「この説明では誰も理解できないだろう……」という講義も何回かに一度は許されてもいい。時には「えっ、なにこれ？ ちよつとわからない、どうしよう……」という学生たちの緊張感も必要だろうと思う。すこし緊張した関係性がむしる豊かな学びを引きだしているようなのだ。

防災分野などでも「防潮堤の存在ゆえに、住民の避難行動に遅れが生じる」という。津波の災害にあうたびに、「あの防潮堤をもっと高くして！」との要求が高まるけれども、それにも限度はある。「これくらいの高さがあれば、きつと大丈夫！」と防潮堤はいつも強がろうとするけれど、ときには〈弱さ〉を認め、開示することも必要なだろう。「あれっ、今回はちよつと危ないかも……」と早めにつぶやいてくれたら、それに対するわたしたちの備えや工夫をもっと引きだせるはずなのだ。

同様のことは、いま各方面から期待されつつある人工知能やロボットにも当てはまるものだ。自動で運転をしてくれるクルマというのも便利そうだけれど、いつも強がってばかりいてはどうかと思う。「ちよつと、こんな霧では自信がないなあ……」とときどき弱音を吐いてくれたら、ドライバーもすこしは手伝ってあげようかという気になることだろう。これでは自動運転システムとはならないだろうけれど、ときには⑦ お互いの〈弱さ〉を補完しつつ、相互の〈強み〉を引き出すという関係性も大切にしたい。「さすが、慣れたもんだね……、こんなところを器用に運転できるんだから……」とつぶやく自動運転システムを横目に、ときには得意顔でドライバーがハンドルを握るような場面があってもいいのだ。

(岡田美智男『「弱いロボット」の思考 わたし・身体・コミュニケーション』による)

問一 波線部 a・b の言葉の意味として、もつとも適当なものをそれぞれ次の中から選んで、記号で答えなさい。

a 勤しむ

- ア 集中すること。
イ はげむこと。
ウ 控^{ひか}えること。
エ 仕えること。
オ 成功すること。

b 至れり尽くせり

- ア 全てのことが自明で、簡単な様子。
イ 手際が悪く、修正を要する様子。
ウ 全てにおいて、手を入れなければならない様子。
エ 完璧で、非の打ちどころのない様子。
オ 行き届いていて、申し分のない様子。

問二 傍線部①「個々の〈弱さ〉」とありますが、「お掃除ロボット」における「弱さ」とはどのようなことが挙げられますか。本文の内容を踏まえて、そのうちから二つ、答えなさい。

問三 傍線部②「それでおしまいということにはならない」とありますが、なぜですか。その理由を本文の表現を用いて六十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「消耗戦を強いられてしまう」とありますが、どういふことですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 本来の目的を見失って、ただひたすら機能を付加し続けていくことを追求するようになってしまったこと。
- イ とにかく何でも付加していくことこそが価値とされ、いずれは手詰まりの状態におちいることが必然になってしまうこと。
- ウ 本来的な部分以外での競争に注意がそらされてしまい、結果的に中心的機能の低下をもたらしてしまうようになること。
- エ 本来的な部分以外の付加された機能が多すぎて、その性能を發揮させるために多大な労力を要するようになってしまうこと。
- オ 本来の目的を見失って目先の売れ行きにのみ固執してしまい、製品の開発費用が底をついてしまうこと。

問五 傍線部④「至るところ」とありますが、本文においてはどのような場面が挙げられていますか。二つ、答えなさい。

問六 傍線部⑤「こうした場面に遭遇するたびに、お掃除ロボットの気ままさやあつけらかなとした姿もいいなあと思う」とありますが、このように肯定しているのはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑥「すでに心得ている」とありますが、その「心得ている」内容としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア わかりにくい講義があったとき、学生たちに不必要な緊張感をもたらしてしまうものになるということ。
- イ 学生たちにとってわかりにくい講義があった方が、何かをつかみ取るうとする姿勢につながるということ。
- ウ 学生たちに全くわからない講義をすることだけが、学びに必要な緊張感をもたらすものだということ。
- エ どういう内容や表現の講義が、学生たちにとっては理解が難しいものになってしまうかということ。
- オ 気ままにあつけらかなと「わからない」とする態度があった方が、教師の人間性を感じさせてよいということ。

問八 傍線部⑦「お互いの〈弱さ〉を補完しつつ、相互の〈強み〉を引き出すという関係性」とありますが、これを簡潔に言い表した表現を本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問九

本文の内容を説明したものとしてみっとも適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア お掃除ロボットを具体例として、さまざまなモノに搭載とうざいされる人工知能に人間らしさを加えることの必要性を訴うったえている。
- イ 相手を機械とあなどって思いやりを持たない現代人の傲慢さを指摘して、人工知能への対応の仕方に再考をうながしている。
- ウ モノ作りの技術が進化するにつれ人間らしさが失われつつあることを指摘し、科学そのものに対する警戒けいかいを訴えている。
- エ 人工知能搭載のお掃除ロボットを代表的な例として、人間がつねに優位に立って上手に扱あつかう方法を具体的に示している。
- オ ロボットを導入として様々な場面で、現代人の周囲への意識が必要以上に厳しく窮屈きゆうくつなものになっていることを示している。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 生物はコキユウして酸素を取り入れる。
- ② 世界では様々なシユウキヨウが信じられている。
- ③ 中世では貴族がトツケン的な力をもっていた。
- ④ 海から運んだシオミズで実験する。
- ⑤ アヤマった答えを書かないように注意する。

